

## 戦國楚簡「緇衣」における“宋人・南人”をめぐって

野原将揮

### 1.はじめに

『上海博物館藏戰國楚竹書』、『郭店楚簡』にはそれぞれ『禮記』「緇衣」が収められている(以下、『上博楚簡』とする)。「上博楚簡」については、その全体像や出土地等々、未だ不明瞭な部分が多いけれども、その不明瞭な部分が多いことも我々が興味を惹かれる理由のひとつでもある。本稿では『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』「緇衣」の23号簡における「宋人」・「南人」をめぐる解釈について些か述べたい。

### 2.テキスト対照

[上海楚簡] 子曰、宋人又(有)言曰、人而亡<sub>二</sub>𠄎<sub>一</sub>(恆)

[郭店楚簡] 子曰、宋人又(有)言曰、人而亡<sub>二</sub>𠄎<sub>一</sub>(恆)

[今本] 子曰、南人有言曰、人而無恆

[訓読] 子曰く、南人言有りて曰く、人にして恆無ければ

以上のように、『上博楚簡』・『郭店楚簡』においては共に「宋人」とするのに対して、今本では「南人」としている。どうして「宋人」が今本では「南人」となるのかという解釈をめぐって幾つかの意見があるのでそれぞれを紹介したい。そこから如何に『上博楚簡』が“熱門”であるかが窺える。

### 3.多方面からのアプローチ

「宋人」・「南人」の解釈方法には大きく分けて3つの方法がある。ひとつは、文化的解釈で「南」は一體何を指しているのか、何処を指しているのか、老子との関係、子思との関係等々多岐にわたる。そのほかにも字形から解釈する方法、そして音に関する解釈方法がある。以下幾つか紹介したい。

#### ① 文化的解釈

黄人二は“「宋人」,「南人」之異,便不能以文字學之誤書,通假,意近看待之。”とし、「宋人」・「南人」の違いは誤寫、通假、意味等々の視点から解釈することはできないとする。その上で子思を例に挙げ、次のように説明している(注1)。

---

注 1. 子思は孔子の孫『禮記 中庸』を著す。『史記』「孔子世家」に“孔子生鯉,字伯魚。伯魚年五十,先孔子死。”“伯魚生伋,字子思,年六十二。嘗困于宋。子思作《中庸》。”とある。

## < 黄人二説 >

まず『論語』「八佾」を引く。

“子曰：‘夏禮、吾能言之、杞不足徵也；殷禮、吾能言之、宋不足徵也。文獻不足故也。足，則吾能徵之矣。’”

{先生がおっしゃった「夏の禮について、私は説明することができる、杞の国については証拠とするに足るものがない。殷の禮について、私は言うことができる、宋の国については証拠とするに足るものがない。文獻が足りないが故である。文獻が充分であれば、すなわち私は之を言うことができる。」}

このように杞、宋については文獻が足りないため言うことができないとしている事に注意されたい。

一方、子思が著したとされる『禮記』「中庸」では、

“子曰：‘吾説夏禮、杞不足徵也；吾學殷禮、有宋存焉。’”

{先生がおっしゃった「私は夏の禮について言うが、杞の国については証拠とするに足るものがない。私は殷の禮を学ぶ、宋については証拠とするものが有る。」}

というように、『禮記』「中庸」では宋についてはその存在を証明することができ、言うことができるとしている。これは一體どういうことかいうと、子思は宋に仕えていた経緯があり、その当時相当な苦勞を経験したそうである。その苦勞を忘れないがために『論語』「八佾」で「宋不足徵也」としているところを、『禮記』「中庸」では「有宋存焉」とする。同様に、『禮記』「緇衣」でも子思が宋で苦しかったことを忘れないがために「南人」を「宋人」と作ったと解釈している。この解釋方法はとても興味深いものではあるが、あまりに繁雜で不満を禁じえないというのが正直な感想である。

また來可泓『論語直解』では“南人指吳，楚之人。”とする。饒宗頤『帛書繫辭傳「大恒説」』に“認爲南人，宋人都是指老子一人。”とし、王力波は『郭店楚簡「緇衣」校釋』で“以爲南人指的是住在南方，好淫祠的宋人和楚人，而楚簡「緇衣」由楚人抄寫，楚人不欲自貶而將「南人」抄録成「宋人。」”とする。どれも確証がないけれども非常に興味深いものばかりである。

## ② 字形

何琳儀「郭店竹簡選釋」『文物研究』では、「南」字の下部と「宋」の字形が近似していることを指摘し、故に今本では「南」と変化したとする。実際に、両字を比較してみると、それぞれ字形が近似していると言える。

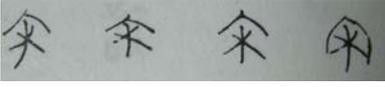


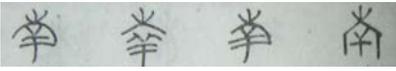
『上博楚簡』23号簡 「宋人」

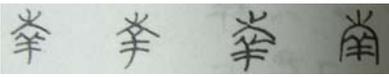


『郭店楚簡』45号簡 「宋人」

何琳儀『戦國古文字典』1998を参照

「宋」  (p.279 包山楚簡)

「南」  (p.1411 望山楚簡)

「南」  (包山楚簡)

何琳儀は「南」字下部が「宋」の字形に近似しているという。また「宋」字のウ冠が下まで長く伸びていると「南」字に近似しているように見て取れる。しかしながら、それが「宋」から「南」へと変化したと明言するわけにはいかない。字形からの解釈もまた確証がない。

### ③ 音韻的解釋

音韻的には如何であろうか。「南」は上古聲韻・泥母侵部、中古音韻地位は泥母咸攝覃韻一等開平聲である。一方「宋」は上古聲韻・心母終部、中古音韻地位は心母通攝冬韻一等合去聲である。ちなみに前者のBaxter再構音は<sup>\*</sup>/*nim*/、鄭張尚芳<sup>\*</sup>/*nuum*/、後者のBaxter再構音は<sup>\*</sup>/*suŋs*/、鄭張尚芳<sup>\*</sup>/*sluups*/である。「-m」韻尾を持つ「南」と「-ŋ」韻尾を持つ「宋」では当然假借とは考えることはできない。しかしながら、「宋」を音符にもつ幾つかの字が「-m」韻尾であるということも指摘しておくべきであろう。例えば、「𠂔宋」の上古聲韻は来母侵部、中古音韻地位は来母咸攝覃韻一開上聲で、「𠂔宋」の上古聲韻は心母侵部、中古音韻地位は心母咸攝覃韻一開去聲で共に侵部で「-m」韻尾を有する。また藤堂明保(1980)に「一例を挙げよう、『詩經』韻部に「中」部<sup>\*</sup>/*oŋ*/という一類があり、それには「冬・中・農・蟲・宋……」などの諧聲系を含み、一般にそれらは『広韻』の「冬・東・江」韻などに分かれる諸字韻を含むにすぎない。しかるに『広韻』には「𠂔宋」「𠂔宋」(桑感の切)という「覃」韻<sup>\*</sup>/*səm*/の字韻が収められている。「覃」韻は上古の「侵」部<sup>\*</sup>/*əm*/に由来するから、秦漢のどこかの方言に、「中」部<sup>\*</sup>/*oŋ*/と「侵」部<sup>\*</sup>/*əm*/とを混合するものがあり、そこで「𠂔宋・𠂔宋」などの諧聲字が作られたため、それが後世に伝承されて、『切韻』の又音として折衷的にとり入れられたものと考えざるをえない。(おそらく前漢の關中方言であろう。)」(pp. 313~314) このように整然たる枠組み内にある諧聲字の歪みの一例として「𠂔宋・𠂔宋」がそれぞれ上古心母侵部・中古心母覃韻として挙げられている。

以上のように、「宋」を諧聲符とする幾つかの字は侵部<sup>\*</sup>/*əm*/で主母音も近似しているこ

とから案ずるに、以下のふたつの可能性が考えられる。

a. 「南人」→「宋人」

『上博簡』『郭店簡』を表記する際に、楚の人が宋を「-m」で発音していたため「南人」を音が近かった「宋人」とした。

b. 「宋人」→「南人」

今本の原型となる書を表記する際に、聞き伝えられた人が宋を「-m」で発音していたため「宋人」を音が近かった「南人」とした。

どちらにしても原本となる書では如何に表記していたかが重要になる。以上のことは、現実からあまりにも逸脱していると言えなくもないが、現状ではこのように予想する以外ないだろう。結局、こういった地域の方言差が「宋人」から「南人」への変化を生み出した可能性があることもまた確証がないのである。

字形が似ており、音も近い等々「宋」字と「南」字の奇妙な関係が明らかになりつつあるが、しかし、どれも想像の範囲を越えるものはなく、どれも確証がないのである。今のところ考を待つしかない。確証はないが様々なアプローチが可能である、そういった面に出土資料の面白さがあり、興味を引かれる理由がある。

	Karlgren	鄭張尚芳	李方桂	王力	上古聲韻	中古音韻地位
「南」	nəm	nuum	nəm	nəm	泥母侵部	泥母咸覃一開平
「宋」	suŋ	sluunʃ	səŋw	suəm	心母終部	心母通冬一合去
「彳宋」	ləm	ruum?	ləmx	ləm	来母侵部	来母咸覃一開上
「彳宋」	səm	sluums	səmh	səm	心母侵部	心母咸覃一開去
「彳宋」	səm	sluum?	səmx	səm	心母侵部	心母咸覃一開上
「彳宋」	səm	sluum?	səmx	səm	心母侵部	心母咸覃一開上

《参考文献》

陳佩芬「緇衣釋文」『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』馬承源篇 2001 上海古籍出版社 pp170  
~pp. 200

何琳儀『戰國古文字典』1998 中華書局 p. 279, p. 1411

黃人二『上海博物館藏戰國楚竹書(一)研究』2002 高文出版社 p. 183

季旭昇・鄒濬智『「上海博物館藏戰國楚竹書(一)」讀本』2004 萬卷樓 pp. 149~pp. 151

李方桂『上古音研究』1980 商務院書館

鄭張尚芳『上古音系』2003 上海教育出版社

藤堂明保『中国語音韻論 その歴史的研究』1980 光生館 pp.313~pp.314

Baxter William H 1992 *A Handbook of Old Chinese Phonology* Mouton De Gruyter.